東方紅黒妹録

【紅魔】ラルア＠黒き悪魔

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

レミリア・スカーレット、フランドール・スカーレットの妹にして追放されし者

「ラルア・スカーレット」これはそんな彼女達

三姉妹の話です

あと不定期更新です

目　次

第1章「全ての始まり」
第1話「追放されし者との再会」　1
第2話「追放されし者の過去」　6
第3話「悪魔の再りｎ…あ、あれ？」　9
第4話「幻想の世界へＧＯーー」　13
第5話「買い物と新たな仲間」　18
第6話「遊びフランＶＳラルア」

第1章「全ての始まり」

第1話「追放されし者との再会」

――――――ラルア・スカーレット――――――

彼女は吸血鬼族の末裔であった……姉が二人いるが知らず…自分が吸血鬼であることすら知らない

しかし…幼くして能力が危険と判断され家を追放されてしまう…

そして…今…彼女は…

人間「いくぞ！野郎ども！今日こそ吸血鬼を倒すぞ！」

一同「お――――――!!!」

育て親の人間とその仲間達と共に吸血鬼殺しに向かうところだった……

人間「お嬢ちゃんもくるのかい？」

ラルア「そうだよ…足手まといにはならないと思う…」

人間「はは！そりゃあ面白い！期待しているよ」

ラルア「うん！」

こうして吸血鬼の館へと…向かったのである…

この時彼女は知らなかった殺しにいくのが自分の家族だということに……

――――２時間後――――（吸血鬼達の視点です）

レミリア「お母様、お父様きました…人間が…」

父「どうやらそのようだな…」

母「えぇ…そうですね…」

父「レミリアお前はフランを呼びに行け俺らは人間達を迎え撃つ！」

レミリア「分かったわ…」

こうして父と母の下を離れたレミリアだった…

――――最前線――――

父「はぁ…はぁ…おのれ…人間に雇われたか！ダンピール風情が…」

ダンピール「貴方達を倒すのが私の使命ですので…」

――――１０分後――――フランを連れてきたレミリアは…

レミリア「うそ…なに…これ…」

フラン「お姉様こっち…」

フランが見つけたのは母と父の死体だった

レミリア「くッ…人間め…許さない…行くわよフラン！」

フラン「うん！人間倒す！」
そして最前線で戦うレミリアとフラン
人間「ぐわぁぁぁぁぁぁ…」
レミリア「これで…あと残るは百人…」
フラン「そうだね…はぁ…はぁ…」
人間達「弱ってるぞ！いける！ん？嬢ちゃんどうｓ（ザクッ…」
レミリア「はぁ…はぁ…グングニルがあたったけど…何が…」
フラン「お姉様あれ！」
レミリア「あれは！」
そこには黒き翼をもつ少女がいた
人間「てめえも化け物か！」
ラルア「？なにをいっているんだ？私は…人間…」
人間達「やっちまえ！」（百人が襲いかかる）
ラルア「訳が分からないけど敵っことでいいよね…じゃ容赦しない『デスサイズ』」
ラルアが出したのは自分の身長の四倍はあろう大剣だった
ラルア「消し飛べ！」
人間達「ぐわぁぁぁぁぁ！（ザクッ…ザクッ…）」

次々に切られていった…
そしてラルア以外の人間は全員死んだ…
ラルア「はぁ…血だらけ…」こんな感じ↙

その時ラルアに近づいてくるものが二人…
ラルア「!?誰だ?」
レミリア「私はレミリア・スカーレットで、こっちが…」
フラン「妹のフランドール・スカーレットよ会いたかったラルア!」
ラルア「会いたかった?それに貴方は吸血鬼…グっ…?吸血鬼…?レミリア…?フラン…?」
ラルア失われた記憶がよみがえる…
ラルア「……レミリアお姉様…?フランお姉ちゃん…?」
レミリア「どうやら思い出したようね…」
ラルア「会いたかったよぉ～」(泣)
そういって抱き着くラルア
フラン「私達もだよ」

こうして彼女達は再会した――――――

ここから彼女達の物語が始まる――――――

第２話「追放されし者の過去」

では…話をしよう…
これは…今から…１億年…いや…１００年ほど前のお話…
母「あなた生まれたわ！」
父「おぉそうか！名前はどうする？」
母「ラルアにしようと思います」
父「いい名だ…レミリア、フラン妹のラルアだぞ」
レミリア「妹ね…ラルアかわいい……」
フラン「いもーと？」
レミリア「そうよフランもお姉ちゃんになったんだよ」
フラン「ふーーーんよろしくね！ラルア！」
この時は誰もあんな悲劇が起こるとは思いもしなかった…
ラルアが生まれて丁度１００年悲劇がおきる…ラルアが暴走し龍を呼んだ…
ラルア「うぉぉ！いでよ我が最強眷族にして破滅の龍！『エクリプス』」
そして…エクリプスは破壊の限りを尽くした…（眷族とかメイドとか２００人ほどが

犠牲になった）

ラルアはというと…

ラルア「アハハハハハハハ！ハッ！ハハ……（バタッ」

力尽き倒れたのだった…龍はラルアがあらわれたと同時に消滅したのだった…

そして目覚めると…

ラルア「なんだこれ…!?え…なんでみんな死んでるの？」

父「お前がやったんだ…ラルア！」

ラルア「うそ…そんな…」

父「だがお前を殺したくはない…やむを得ん…ラルアの記憶を消去しその後追放しろ！」

ラルア「え？まって！お父様ぁぁぁぁ!!」（記憶を消されるラルア）

父「どこかで強く生きなさい…」

レミリア「お父様…ラルアはどうしたの？」

父「追放した…やむを得ずな…」

レミリア「そんな…」

父「すまない…分かってくれ…これもラルアのためなんだ…」

フラン「……ラルアには…もう会えない？」

父「分からない…だが…ラルアなら外でも生きていける…だからきっとどこかで会える」

フラン「うん！フラン信じてる！」

こうして黒き悪魔、ラルア・スカーレットは家を追放されたのだった……

――――――――――ラルアもといエクリプスが及ぼした被害は尋常ではなかった――

眷族及び眷属、メイド合わせて３００人以上の者が犠牲となった……

ラルアから逃げ途中で殺されたのがほとんどだがなかにはラルアを止めようと戦った者もいたらし……

だが…黒き悪魔と黒き龍の前になすすべなく殺されてしまったという…

それから父、ヴェリナード伯爵は復興作業にてをいれたという…

――――――――――そしていっそうレミリアとフランの修業に力をいれたという……――

そう……ラルアと共に人間達が攻めてくるあの日まで……

第3話「悪魔の再りｎ…あ、あれ？」

レミリア「よく…戻ってきてくれたラルア…」
フラン「ねーねー久々遊ぼうよー」
レミリア「それは構わないけど…まずはかたずけしましょう？」
ラルア「そうだよお姉ちゃ…グっ……!?」
フラン「ラルア？」
ラルア「お願い…離れて…」
レミリア「フラン！下がりなさい…」
フラン「でも…」
レミリア「今は見守ることしか…できない…信じましょ？ね？」
フラン「分かった」
そしてラルアから離れるレミリアとフラン
レミリア「万が一の事がある武器を出しときなさい」
フラン「……分かった…」
そうして『グングニル』を構えるレミリア『レーヴァテイン』を出すフラン

ラルア「グあぁぁ?!ぬっ…ウウぅに……逃げテ…」
レミリア「ラルア!!」
少しずつ狂気に支配されていくラルア…
レミリア「くっ…こうなれば…やりたくはないけど…」
『グングニル』を放とうとするレミリア
フラン「まって！お姉さま！」
レミリア「フラン?」
フラン「私が止める！」
レミリア「で、でもフラｎ「お願い！」分かったわ…任せる…」
フラン「ありがと…あ、お姉さまもう一つお願い…」
レミリア「なに?」
フラン「悪いけど…ちょっとばかし寝てて?」
そう言ってレミリアに腹パンするフラン…
レミリア「ガっ…フ、フラ…（バタッ…
いとも容易く気絶するレミリア…
フラン「ごめんね…お姉さま…さて…やりますか！」
て…あ、あれ?『レーヴァテイン』しまってますよこの人（人ではない）

フラン「ふふっ…えいっ！」
ラルアに飛びつくフラン…
フラン「えいっ！んっぅ…」
ラルアに口付けをするフラン、かなりがっつり…
ラルア「!??ガァァァァ!!??」
訳が分からず混乱するラルア
ラルア「ガァァァ!!!」
ようやく状況を理解したのか…抵抗するが…フランの力が強く逃げ出せない…それどころか舌を絡めてきた
ラルア「ガッガ……!?んんっぅ!?」
正気に戻ったラルア凄い驚いた顔をする……
フラン「んんっ…ぷはぁ…」
ラルア「はぁ…はぁ…」
ようやくフランが拘束を解いた
ラルア「お姉ちゃん……魔力吸ってたでしょ…」
フラン「そうだよ…ラルアの口の中…甘くて美味しかった…」
ラルア「ばっ…ばかぁ……!!」

顔をを真っ赤にするラルア
ラルア「でも…嫌いじゃなかった…それにお姉ちゃんも甘かったよ…あと助けてくれてありがとう」
フラン「そう…どういたしまして今度はちゃんとしたときに…ね?」
その時…
レミリア「うっ…うーーん…あっ…あれ?終わってる?」
フラン「あっお姉さまお目覚め?」
レミリア「えぇ…ラルア大丈夫?」
ラルア「大丈夫!お姉ちゃんのおかげ!」
レミリア「よかった…さて…ラルアも戻ってきたことだし掃除の続きよ!」
フララル「おーーーー!!」
――――――――――――――――一件落着したのであった――――――――――――――――

第4話「幻想の世界へGOーー」

――――掃除の途中――――

「そういえば…フラン、ラルア『幻想郷』って知ってるかしら?」
フララル「幻想郷??」
姉の問いに同時に答えた二人
「そう言うと思ったわ…説明してあげる」

――――少女説明中――――

「なるほど…楽しそうなところ!」
はしゃぐフランと
「ふむふむ…で行き方は?」
冷静なラルア
「あ!・行き方はねぇ…」
(以外反応が予想の反対だった…)
そんなことを思ったレミリア

「親友の魔法使いに連れってもらうの！」
　パチェですね分かりません
「はやく！はやく！」
「落ち着きなさいフラン…」
「んー私が室内とかかたずけしとくからお姉様はその魔法使い連れてきて」
　恐ろしく冷静なラルア
　これあれだ着いたら発狂するパターンだ
「分かったわかたずけお願いね」
　飛び去るレミリア
「さてさてさーてやりますか！」
　張り切るラルアフランはというと…
「Ｚｚｚｚｚｚ」
　発狂し疲れたのか…寝ていました…
（しょうがないなぁ…お姉ちゃんの部屋まで運ぶか…）
――――――――数分後――――――――
「連れてきたわ」
「お姉様お帰りなさいで、そちらは？」

「パチュリー・ノーレッジよパチェとでも呼んで」
魔法使いが名乗る
「私はラルア・スカーレットよろしくね！パチェ」
「そういえばフランは？」
レミリアが問う
「ん？お姉ちゃんなら部屋で寝てるよ」
「そう…」

――――――――――同時刻フラン――――――――――

「ラルアー？ラルアー？」
（来ない…つまり近くには誰もいない…）
「あぁぁぁぁぁ!!ラルアに！妹にお姫様抱っこされた！腕温かったな…寝たふりって悪くない！今度はお姉様にしてもらいたいなぁ……お姉様…帰ってきたでしょ多分……行くか…」
自分の部屋をでるフラン

――――――――――

「じゃあパチェお願いするわ」
「任せてレミィあと図書室でいいのよね？」

「えぇ…」
うなずくレミリア
「……私いらないよね？」
立ち去ろうとするラルア
「あーー好きにしてていいわただし館は出ないでね」
「はーーい」
そうゆうと猛スピードでどこかへ行った…
少女移動中…
「ここが図書室ね…図書館くらいあると思うけど…まぁ始めましょう！」
――――――ラルア――――――
「うーーん屋上はいいねぇ…」
――――――フラン――――――
「あっ…図書館いこ」
――――――
「そろそろ行けるわ」
「あっお姉様いた！」
「起きたのねフラン一応自己紹介しなさい」

「フランドール・スカーレットですよろしく」
「パチュリー・ノーレッジよよろしく…じゃ行くわよ『幻想郷』に『移動魔法』《ルーラ》」
館全体が少し揺れる
「ついたの?」
「えぇ…そのはずよ」
《ぎゃぁぁぁぁ!!!」
「なんか聞こえなかった?」
「屋上の方から…まさか!?パチェラルアを呼び出して!」
そう『幻想郷』は今昼である『太陽』が出ている
「!?はいはい…『メザイア』」
すると若干焦げたラルアでてきた
「し、死ぬかと思った…」
レミフラ（ドジだ…だがそこがかわいい）
――――――――その後回復魔法で治りました

第５話「買い物と新たな仲間」

「むむ?ここは?大図書館か?」
　目を覚ますラルア
「お、起きた」
「なんで屋上にいたんだか…」
　心配そうな顔するレミリアと反応が冷たいフラン
「そんなことより!買い物行きましょう!」
「!?」
　いきなりレミリアが買い物行こうと言いだした
「あーーじゃあお姉様とお姉ちゃんで行ってきて私まだ動けそうにない」
　因みに嘘である一番下の配慮だろう
「そう…分かったわフラン行くわよ」
「はーーい」
　こうして姉二人は出かけたのだった…
「さて…行かせたのはいいものの…暇だな…む?」

外から強い「気」を感じたラルア
「行ってみるか…とその前に『太陽拒絶』」
太陽で焼かれないよう魔法をかけてから外の門に向かうラルア
――――――――吸血鬼移動中
「ここになにようだ？」
「貴方が『スカーレット家』当主ですか？」
謎の女が聞いてくる
「残念ながら当主は姉だそして今留守だ」
「そうですか…手合わせしたかった…」
悲しそうな顔をする女
「……丁度私も暇なのだ私でよければ相手をしよう…退屈はしないはずだ」
「いいんですか？」
「あぁ…」
「では…お言葉に甘えて」
「こい！」
構える両者
――――――――そのころ人里では

「見て見てフラン！あの服可愛い！」
「お姉様はしゃぎすぎ落ち着きなって…」
「そんなお姉様好きだけど…（ボソッ
「ん？なんか言った？フラン？」
「え？なんでもないよ」
　誤魔化すフラン
「それより早く帰んないとラルアに悪いよ」
「はっ！そうだった…！」
（くそもう少しフランといたいでもラルアも捨てがたい…よし今度は３人でこよう）
　心の中でそう決意するレミリア
「じゃ帰りましょうかフラン」
「はーーいお姉様」
（今度はラルアと行きたい…）
　フランもフランでそう思っていた
――――――――紅魔館
「やるね…」
「そちらこそ…」

ほぼ互角だった
「これで決める黒符『断罪の刃』」
「いきます！光符『華光玉』」
どーーーーん
「ひゅーここまでとはね…お姉様達以外で私の腕を消し飛ばしたのはあんたが初めてだよ…名前は？」
もちろんのごとく腕を再生しながらいうラルア
「あ、ありがとうございますえーと……名前…ないんです…」
口ごもりながらいう女
「まじか!?なら私が名を与えよう…」
「ほんとですか!?」
「あぁ…そのかわり…ここ『紅魔館』で働く気はないか？」
「……是非！というか手合わせして従者になるのが目的だったんです！」
「それを先に言えよ…まァいい…名前は……『紅美鈴』などどうだろうか？当主はお姉様だからお姉様の『紅き悪魔』からとって」
「紅美鈴…ありがとうございます！」
「とりあえず中に…お姉様達の帰りを待ちましょう…」

・・・・・

「はい！ラルア様」

中に入っていく二人

――――――今ここに紅美鈴が誕生したのであった…

第6話「遊びフランVSラルア」

「はえーー広いんですねー迷いそうです…」
「まぁ…ね…うーーんそれはなれだなー」
　ラルアは館内を美鈴に案内し丁度1周し玄関に戻ってきた
「お姉様達まだかなーー」
　ガッチャ…「「ただいまーー」」
「ん…おかえり」
「おかえりなさいませ」
「ッ…誰!?」
　身構えるレミリア
「申し遅れました今日からここで働かせて頂く紅美鈴です名前はラルア様に頂きました」
「ラルアに?」
「そっ…私がつけた」
「……ふーーーん」

ここでようやく声をだしたフラン
「とりあえず荷物おいてくれば？」
正論である
「それもそうね…フラ…てっはや!?」
――――――――２０分後
「とりあえず自己紹介ね私はフランドール・スカーレット」
「私がレミリア・スカーレットよ」
自己紹介する二人
「宜しくお願い致しますお嬢様、妹様」
「ねぇ…ラルア、お姉様…！」
「うん？」
「なにフラン？」
「遊びたい」
「「……」」
沈黙する二人
「……悪いけど美鈴について私には仕事があるの…ラルア頼んだわよ…ついてらっしゃい美鈴！」

「はい…お嬢様」
　こうしてレミリアと美鈴が離れた…
「えーでお姉ちゃん普通にやればいい？」
「そうよ…久々に楽しみましょ？」
「いいよー久々にやるか…」
　外にでる二人（今夜え？時間たちすぎ？しらない）
　　――――――レミリアの部屋
「美鈴よく見ていなさいあの子たちの戦いを」
「はい……！」
――――――――――
「いくよー？禁忌『クランベリートラップ』」
「……闇符『サタンの招来』…」
　相殺である…
「……弾幕やめない？お姉ちゃん」
「そうだね…禁忌『レーヴァテイン』ラルアいつもの大剣？」
　　≪カシウス≫
「いいや…違うよ…神槍『真紅の大槍』」

ラルアの手の中に槍が造られていく

「新しい武器？お姉様のグングニルがモデル？」
　面白そうといううう表情をして質問してくる
「うん…正解…！じゃあいくよ！」
　突っ込みラルア
「たぁっ!!」ぶんっ
「あぶなっ！」
　持ち前の身体能力で避けるフランだが…こんなことを考えていた
（明らかにやばい…！あの槍ただものじゃない……！）
「ならっ…はぁぁぁ!!」
　攻めに入るフラン
「うわっととと…せいっ！」
　レーヴァテインをカシウスで防ぐラルアそして…
「今っはぁぁ！」きんっ
　レーヴァを弾き飛ばす

「!?あー負けたか…」
大人しく負けを認めるフラン
「よしっ！」
大満足なラルア
――――――――――レミリアの部屋
「うわぁぉ…二人ともやるわねぇ…」
「そうですね…特にラルア様の『カシウス』が一番驚きました」
この二人も関心していた